

JACS

Japan Architectural
Consortium of Students

全日本学生建築コンソーシアム

後援:朝日新聞社、ジャパンホーム&ビルディングショー事務局

2013

residential design competition

[住宅設計コンペ]

theme

『郊外住宅の新定義』



theme

『郊外住宅の新定義』

かつてTVドラマのモデルにもなって、華やかで勢いのあった「ニュータウン」や「新興住宅地」。

都市周辺部の郊外と言われるところにできた住宅団地が、近年住んでいた人も高齢化し、建物も老朽化し、様変わりしつつあります。

70年代80年代は核家族を中心に「マイホーム」という“夢”をかなえた住宅地でしたが、家族形態も崩れつつあります。

そこで、その郊外はこれからどうあるべきか、社会全体を視野に入れ、これからの郊外の住み方、あり方を考えて提案してください。

条件として

- ▶ パソコンやインターネットを利用して自宅で仕事をすることも増えていますので、新しい「SOHO」を希望している施主であることとして設計して下さい。
- ▶ 家族構成、職種等は自由
- ▶ 敷地は、古い地主が持っていたところが手放され、宅地として分譲販売された所としてください。



design condition

**建物の配置から仕様まで、
総合的に提案してください。**

テーマの解釈は自由です。設計主旨でご説明下さい。

テーマをふまえ、建築・販売を前提とした住宅であること。敷地に対する景観を最大限に考慮したデザインで、間取りは、家族条件を考慮し、近隣住民とのコミュニケーション等、公共的な視点にも配慮すること。将来的にデザイン住宅増大に寄与することをめざしたもので、記載項目を満たすこと。

テーマ『郊外住宅の新定義』

敷地概要

ある都市近郊の住宅地(特に考慮すべき気象条件は定めません)

- 用途地域／第一種住居地域
- 容積率／200%
- 敷地面積／168.25m²(50.89坪)
- 地区計画／壁面後退 隣地側1m以上(仕上り面)
道路側1.5m以上(仕上り面)
- 建蔽率／60%
- 地盤の高低差／なし



家族条件

職種とともに
自由に設定して
ください。

建物条件

構造 木造在来工法
建築基準法上、建築可能のこと。
(建築に関わる各種法令などを遵守)

※記載項目より細部にわたる条件については、常識の範囲内で各自想定のこと

応募資格

- 平成25年4月1日現在在学中の学生(大学・専門学校・短大・大学院他)

1次審査 要求内容

- 設計図面(縮尺は1/100)
 - 配置図(1階平面図兼用) ●各階平面図(北を上部に配置) ●立面図(2面以上) ●断面図(1面以上)
- 外観パース(模型写真に代ても可)

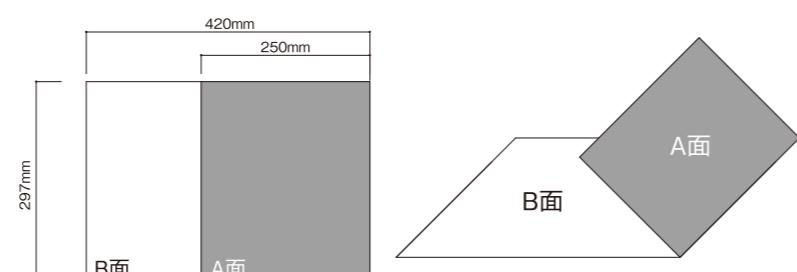
【用紙規定】(右図参照)

※ボードは避けて下さい。丸めないで下さい。

厚紙A3サイズ【ケント紙程度】
(297mm×420mm) 1.5枚

横使い右綴じ

※A、B面共裏面使用不可



A面：テーマを踏まえ「設計主張」「概要」を解りやすく自由に表現して下さい。
但しこの面に「外観パース」1面以上を描いて下さい。

B面：各階平面図、立面図(2面以上)、断面図(1面以上)を表現して下さい。

提出先 (2カ所)

1. 図面郵送：JACS新潟事務局
〒950-0148 新潟県新潟市江南区東早通1-1-40(株)ステーツ内)「2013設計コンペ係」宛 tel.025-383-5233
2. 図面データ送信：compe@states.co.jp
郵送図面をデータ化(pdf,もしくはjpeg:200dpi以上)し、フォルダにまとめ圧縮して送信

2次審査 要求内容

- 設計主旨説明書
【用紙規定:厚紙A4サイズ(210mm×297mm)1枚】
- 模型(縮尺:1/50)
【敷地を含む全体模型1点 ※それ以外の模型提出は失格】
サイズ：W60cm×D60cm×H45cm以内(ベースを含む)、
材質：紙、バルサ、スチレンペーパー等軽量のもので、
油土等の重いものは避けて下さい。
展示中の自然破壊には責任を負いません。

提出先 (2カ所)

1. 設計主旨説明書、模型郵送：JACS新潟事務局
〒950-0148 新潟県新潟市江南区東早通1-1-40(株)ステーツ内) tel.025-383-5233
2. 設計主旨説明書データ・模型写真1枚送信：compe@states.co.jp
(pdf,もしくはjpeg:200dpi以上)し、フォルダにまとめ圧縮して送信

応募にあたっての注意事項

- 応募は1人に付き1点(グループでの応募も可能)
- 応募作品は未発表の作品であり、他のコンペに提出していないものに限ります。
- 設計図面・設計主旨説明書は、規定のサイズに印刷出力して応募してください。
- デジタルデータのみの応募は認めませんが、入賞作品はWeb上にて全て公開いたしますので
デジタルデータを預めご用意下さい。(jpeg・pdf形式のみ)
- 提出する設計図面、設計主旨説明書、模型の裏面には必ず、氏名・受付番号を記入して下さい。

2013 residential design competition
[住宅設計コンペ]

最優秀賞 「kiosk x house」

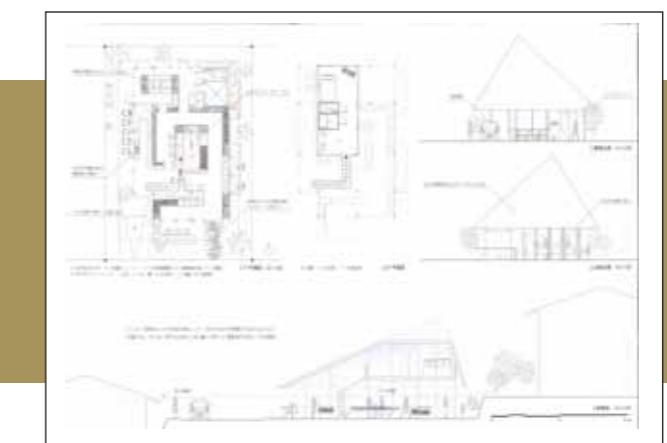
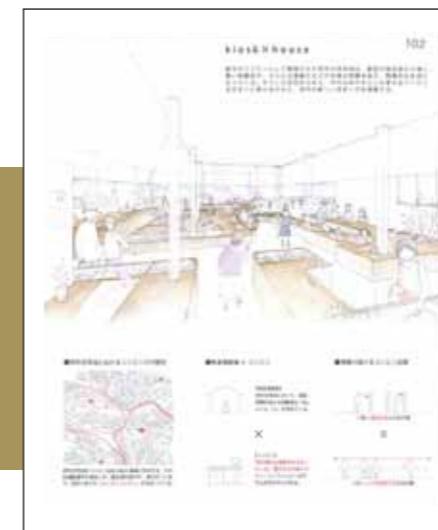
横浜国立大学 大学院
都市イノベーション学府 建築都市文化専攻Y-GSA 西川 博美・小島 衆太



Concept

都市がスプロールして開発された郊外の住宅地は、駅前の商店街から遠く、買い物難民や、さらには高齢化などの切実な問題を抱え、閉鎖的な生活になっている。

こうした状況をふまえ、今や公共の中心とも言えるコンビニを住まいに掛け合わせた、郊外の新しい住まい方を提案する。



2013 residential design competition
[住宅設計コンペ]

最優秀賞 「窓ノマド」

千葉工業大学 大学院 工学研究科
建築都市環境学専攻

大塚 竜也



Concept

都市の住まいでは土地の小ささから部屋は機能的に配置され、住まい手の数と部屋の数が1対となっている。

しかしながらSOHOのように家に長くとどまる人にとって、そのような都市の住まいは窮屈である。

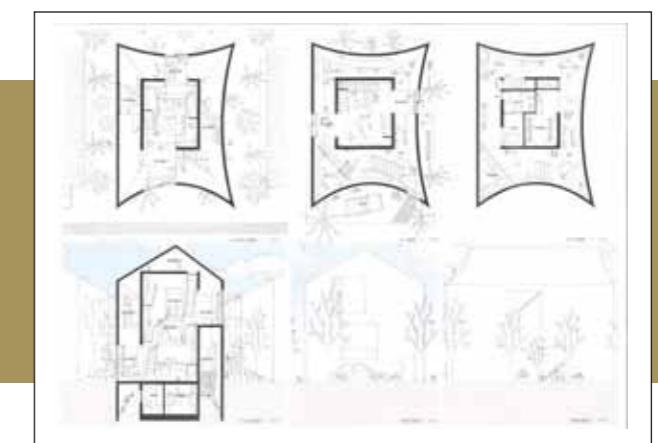
郊外におけるSOHOはそんな人達のためにもっと自由であるべきだと考える。

窓ノマド。個室ではなく窓に住む家。この住まいには個室がない。その代わりに窓に奥行きをあたえる。ドアを開けると土間が広がり、共用のクローゼットから好きな本を持ち、布団を抱えて階段を上り、無数にある窓の中から自分の好きな窓を選んで入っていく。

歪んだ外壁は自然を取り込み、窓に時間や季節による変化を与える。

明日は違うマドで仕事をするのかも知れない。

個室にとらわれない郊外住宅の新しい暮らし方。



2013 residential design competition
[住宅設計コンペ]

最優秀賞 「ひしめくキヨリカン」

芝浦工業大学 大学院 理工学研究科
建設工学専攻

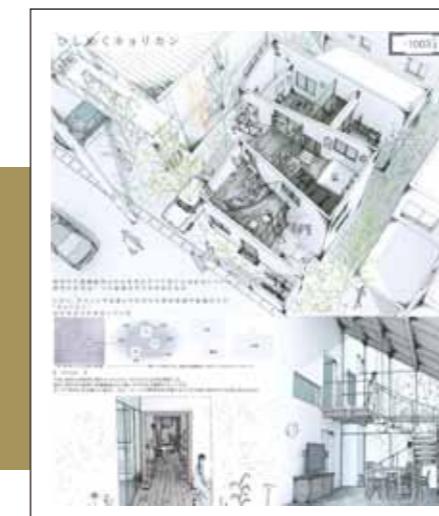
中川 達也

Concept

郊外での複製配列された住宅はすべて同じ方向を向いている
郊外の住宅は一つの家族をそのまま包み込む

しかし、そのことで見落とされがちな周辺地域や家族内での“キヨリカン”がかならずそんざいしている。

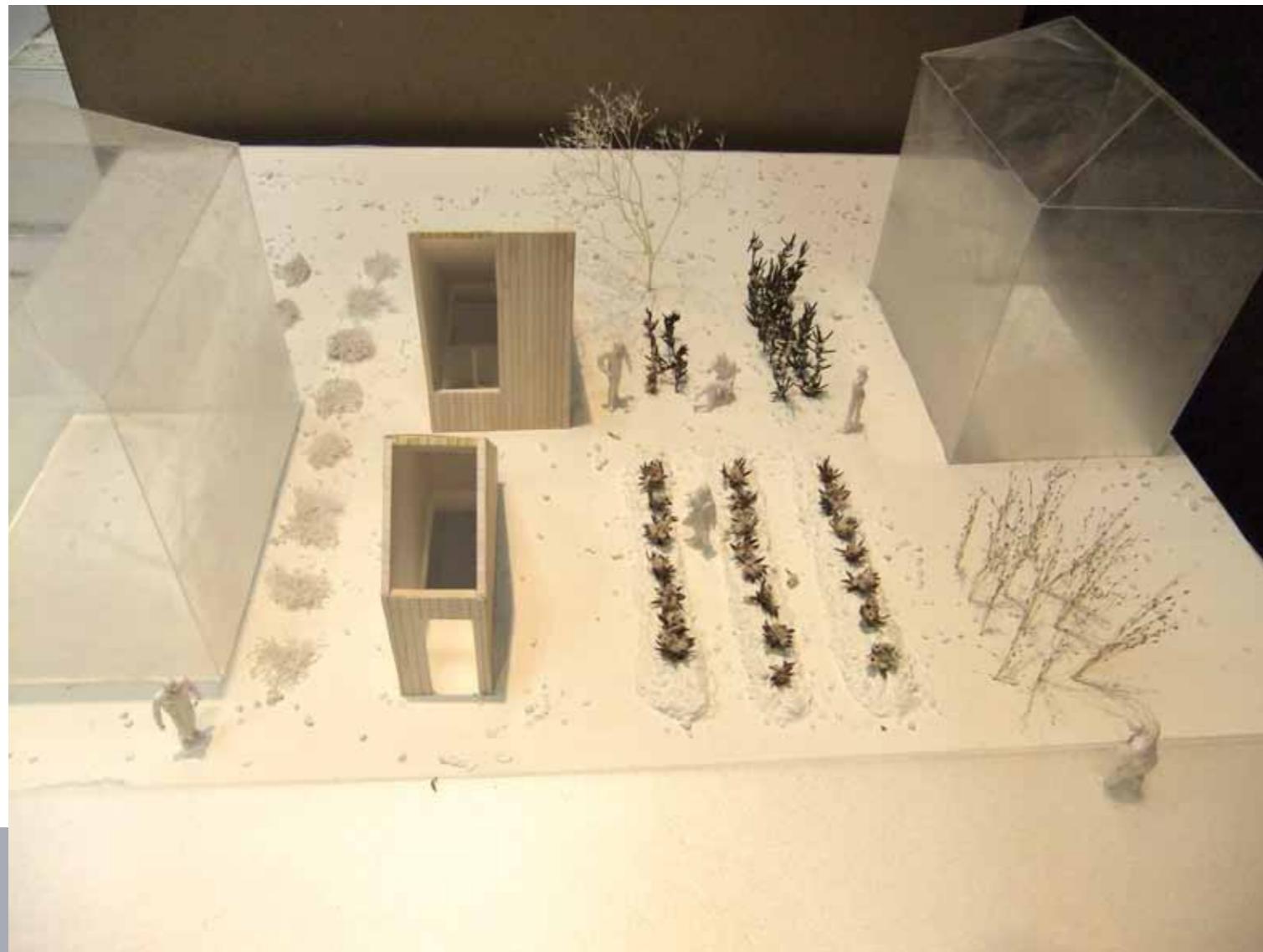
今回、郊外の反復性に隠れた“キヨリカン”をたよりに住宅を設計した。
現在、郊外では家族の活動範囲よりも個々でのそれが顕著になってきた。
そこで、郊外に住む個人に着目し、その一人一人の関係性を考慮することが今後の郊外での生活に求められる。



2013 residential design competition
[住宅設計コンペ]

優秀賞 「開かれた畠と、少し顔を出す家」

明治大学 大学院
理工学研究科建築学専攻 菊池 孝平



Concept

郊外における新しい距離感

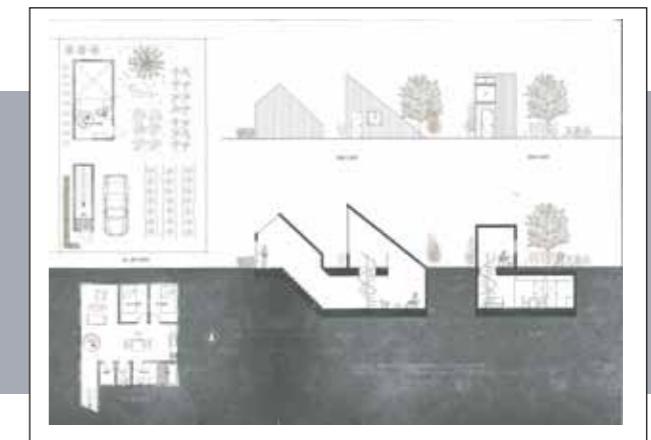
開かれた畠に少し顔を出している家。そこから出てくる母と息子。

畠は母の菜園であり、息子の仕事のリラックススペースである。

例えば、お隣さんが引っ越してきたとして、そこが彼らにとっての公園のようになる。

お隣さんは庭を開いてくれるだろうか。

プライベートのようでいて、パブリックのような場所が、これからの郊外住宅地に広がってゆくような風景を描きたいと考えた。

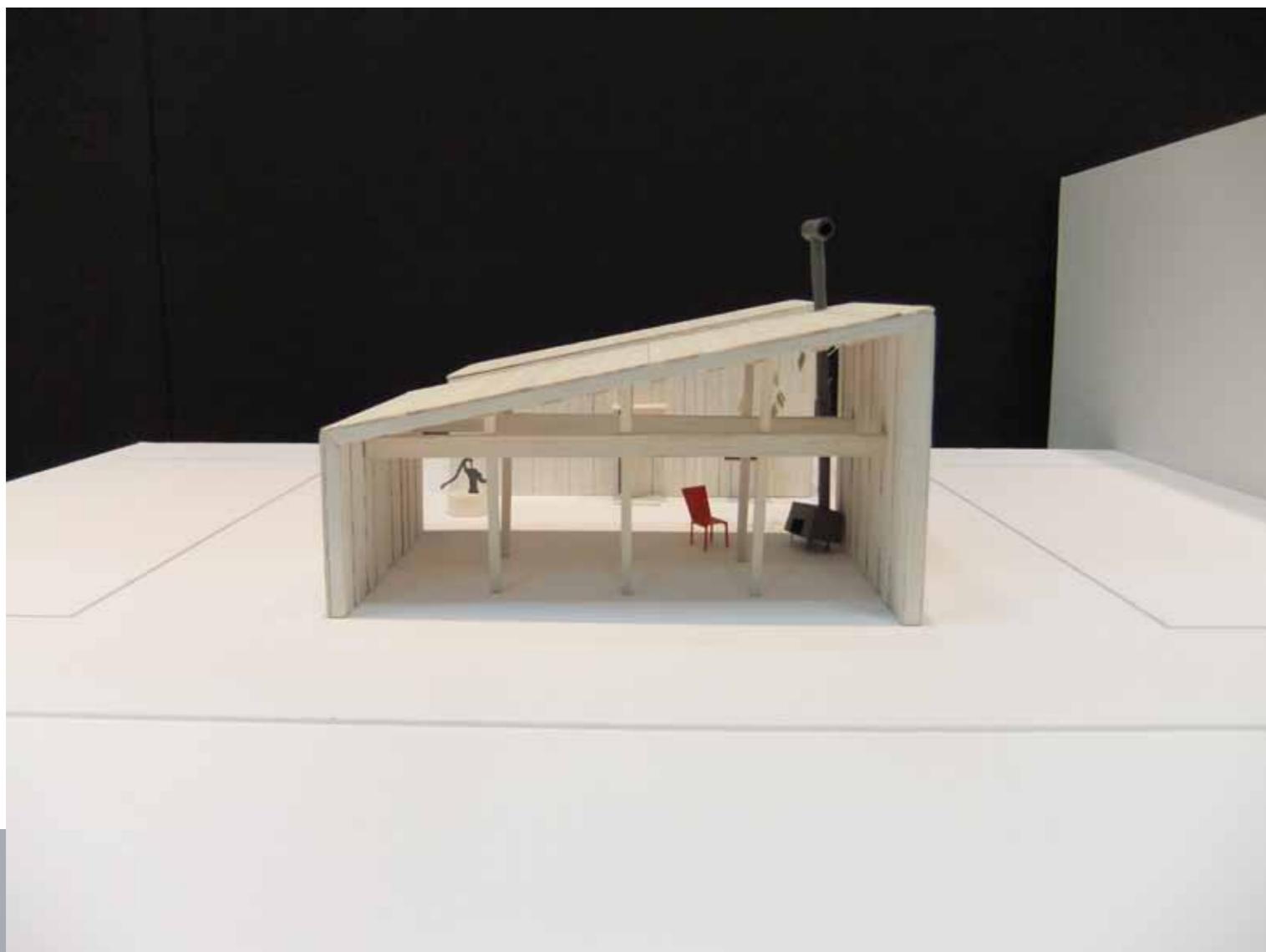


2013 residential design competition
[住宅設計コンペ]

優秀賞 『「住む」・「棲む」というコト』

日本大学 生産工学部
建築工学科

竹内 賢吾・和田 朋秀



Concept

現代の都市郊外の住宅群は家と公共道路がはっきり区別されている。

私達はその境界線を取り除き家が地域に歩みよる住宅を考えました。

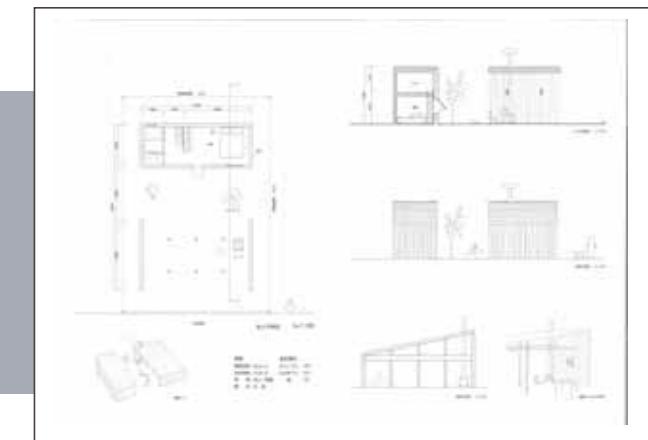
この家は「ウラの家」と「オモテの家」と その間のナカニワ、さらには公共道路も含みひとつの構成とみなします。

「ウラの家」はお風呂とトイレと寝る部屋のみの機能です。

「オモテの家」は 柱・梁・屋根だけのつくりとなっており、特別な機能を持たないからっぽ空間です。

しかし、時としてこの場所は様々な活動を誘発し、地域の場をつくります。

この家に棲むということは家が、地域に歩みより、地域と共に棲むということなんです。



2013 residential design competition
[住宅設計コンペ]

優秀賞 「路地付き一戸建て」

日本工業大学 大学院
工学研究科 建築デザイン学

湯浅 和也

日本工業大学 工学部
生活環境デザイン学科 橋本 溫子



Concept

庭付き一戸建てから路地付き一戸建てへ。

似たような道の間に似たような塀に囲まれた似たような庭、その中に似たような家が反復して建ち並ぶ。こんなどこにでもあるような都市に付随する郊外住宅地。一見するとそこは静かで、とても住みやすい場所かもしれない。

しかし、高い塀に囲まれた住宅はどこか街や人との接觸を拒んでいるように見える。そんな住宅街に夫婦2人のための住宅を計画する。

塀がない庭、道と繋がる路地、路地の様な動線、道のすぐ脇にはみんなの集まる庭がある。庭と繋がり、二階へと続く路地の様な土間がある。土間と並んで奥へと続く路地がある。

建物全体に広がる路地。街に広がる路地。誰もが気兼ねなく立ち寄れる土足の空間を広くとり、街や人と関わるための路地の様な空間を住宅に挿入する。

消えた境界線からはみ出すように路地が浸食し、周りの建物の開く方向を決めていく。

この家は街や人を受け入れる。人と人が繋がる場となる。



2013 residential design competition
[住宅設計コンペ]

優秀賞 「窓の家」

京都工芸繊維大学 大学院
建築設計学専攻

差尾 孝裕



Concept

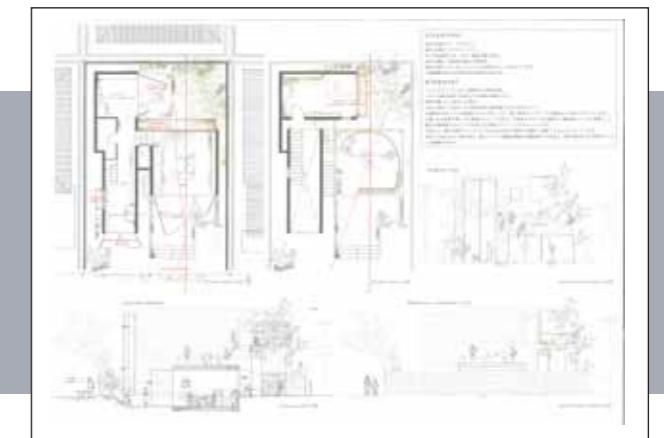
従来の郊外住宅という建物は住居専用であることを前提として購入されていました。

しかしこれからの郊外住宅は職住を一体として考え、働く場所をパブリックな場所として街に開いていくことが求められています。

この開くという行為を住宅の窓に置き換えて考えてみました。窓とは本来は開くことで外の景色と風を取り入れることが目的でした。この家はそんな窓をおおきく肥大化した住宅です。とても大きな窓はその大きさがゆえに、窓を開ける行為そのものが家をまちに聞くことを想起させてくれます。

通りに面したおおきな窓は仕事を通じた暮らしを外に発信していくとともに、中での住まいぶりをあらためるきっかけにもなります。

さらに窓を開け放てば家の様相はより開放的なものへとかわり、それはまちの風景をも変えていきます。仕事の打ち合わせ。近隣住民との交流会。地域教室の開催。窓が住宅を自由なかたちへとほどいていく。



準優秀賞



「賢い八百屋」 郊外を彩る人と野菜のネットワーク

法政大学
デザイン工学部 建築学科 山口 雄司

かつて特に意識をしなくても地域での繋がりは存在し、ご近所とは顔見知りであつた。家の近くに必ずあった商店街は、買い物するための場所ではなく、住民どうしの交流の場でもあった。お店の店主とはもちろん、買い物時に集まるご近所さんとの世間話は、大切な情報源でもあった。

現代では、特に郊外において大型ショッピングモールが個人商店を衰退させ、便利さと引き換えに人情味あふれる交流の場を失い、個人商店がつなぎ止めていた地域の繋がりは薄れてしまった。

最初からショッピングモールしかない郊外の新しく開発された住宅地でも同じ様な現象がおきている。

そこで郊外住宅の新定義として、ショッピングモールの便利さと個人商店の地域性を合わせた新しい家族経営型・商店住宅を提案する。情報化社会のメリットを活用し、デジタルとアナログが生み出す相乗効果によって住宅地は再び活気を取り戻し、無理せずお互いの理解と協力の絆がうまれる。



「踊る屋根の住処」

京都工芸纖維大学 大学院
工芸科学研究科 建築設計学専攻 阿部 敬一・湯佐 和久

住まう家族に合わせた屋根から生まれる郊外住宅。
屋根は1つの家のみならず、集まれば街の風景をも形成することができるものです。
しかし郊外の新興住宅地を見ると、同じような家や屋根が連なる、時代の在り方を示すような風景があります。

そんな屋根の振る舞いを再定義する事で、これから郊外住宅を考えました。この家は、光や緑を受けるように、人と家と街とを結びつけるように、それぞれが踊るように固有の傾きや開口をもつ三枚の屋根からできています。

その屋根から押し出され生まれた内部には大小様々な屋根裏のような空間が展開され、中央の屋根が、住まう場と働く場、さらには街と家とを緩やかに繋ぎ合わせるものとして振る舞います。

そこに表出する屋根下の暮らしと街へとにじみ出すことで一つの小さな風景となり、やがては新たな郊外住宅の姿を描きます。

佳作 (21点・順不同)



「反転の家」

立命館大学 大学院
理工学研究科
建築都市デザインコース 佐藤 建

1.郊外住宅は、分譲され切り分けられた土地に対して設計を行う、もしくは商品住宅を配置していく。その際、防犯やプライバート性を確保するため、塀や柵で執拗なまでに閉ざすことで成り立っている。そのため周辺との関係は希薄になり、閉ざされた庭の中の生活となる。

2.イエ型の住宅を地面と平行な水平面を軸に鏡面反転させる。

3.プライベートな空間が地上を離れ空に配置されることで、上空に広がる街の眺めと周辺の様子を獲得する。残されたもうひとつのイエ型は、地上で住宅とは異なる星七をもつSOHOとして活用され、前後に周囲と繋がりを持つ小さな庭を獲得する。

佳作 (21点・順不同)



「向きあうイエ。」

東京理科大学 二部工学部 建築学科
橋本 光秀・石村 大輔

イエを3つの領域に分けました。「住まうイエ」「働くイエ」「大きな庭」。
3つの領域がグラデーションナルに「マチ」に広がり生活が外まで広がる「向き合うイエ」。
「住まうイエ」はプライベートなイエ、「働くイエ」はパブリックなイエ、真中に「大きな庭」の中間領域。「大きな庭」が多くの要素を重ね合わせ、内部と外部の空間、人と人を繋げます。プライベートな場所であった「住まうイエ」も広がりかたによって、パブリックな場所となります。
ただ空間が広がるのではなくて「ヒトとヒト」、「ヒトとマチ」、「ヒトとシゴト」との関係によって広がり方、性質が変化します。それは「イエとイエ」が向きあい、「大きな庭」が中間領域として多くの要素を繋げていくからです。



「垣なる住まい」

芝浦工業大学 大学院
理工学研究科 建設工学専攻
中村 優太

敷地境界を再考し、郊外住宅における「私」と「共」を再定義する。
私は埼玉の郊外に23年間暮らしてきた。
私の家もそうだが郊外の住宅は北側にヴォリュームを置き、南に庭を配置、そしてプライベートを守るために高いブロック塀で家を囲んでいる。
庭はまちに開いているようで塀によって閉ざされている。そこでまず塀を取り払い、建築を敷地いっぱいに建てることで内側にはより見渡せる空間、そしてその外側には「共」の空間をつくり出す。
郊外住宅は量をもとめるため、均質化した、いわゆるコピー＆ペーストされた家が多い。近年それはマイナス要素として考えられるが、私はそれはプラスに変えたいと思った。
360度家を囲んだ縁側は、同じ形式の家が連なることで広いデッキ空間になつたり、高さが違えば、それはテーブルにも棚にも変化する。
各住戸が羽を広げたようなこの家は。プライベート「私」を保ちつつ、隣人との「共」の空間を持つ、郊外住宅の新しい定義となる建築である。



「郊外の骨—吹きだまりの家ー」

芝浦工業大学 大学院
理工学研究科 建設工学専攻
上田 将之

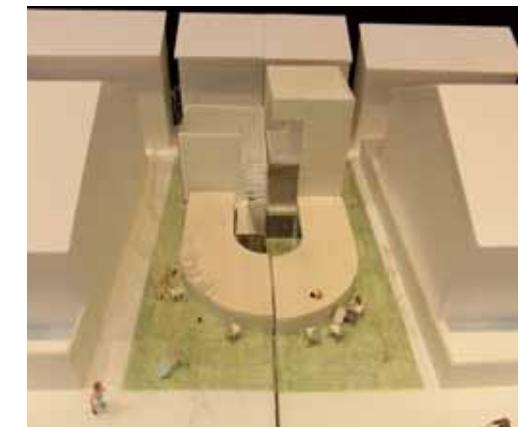
戦後の高度経済成長期、都市へ集中する労働人口の受け皿として開発された都市周縁の郊外住宅地。生存のため同じ向きに陽が当たることを目的に均等に平行配置された郊外では、敷地は細かく縮小され、住宅は敷地一杯に大型化した。そこではただ住むことだけが目的とされ、間取りは形式化され、「広さ」を感じない住宅がまちの均質な風景をつくり出した。
そういった郊外住宅において、「広さ」について考える。狭い敷地において「広さ」について考えることが、今後郊外においてただ住むことだけではない求められるものひとつであると考えた。
そこで、現状の郊外住宅の間取りの骨格を拾い、それを重ね合わせる。L字の壁は今まで通り部屋の決定要因、外界への方向性をつけ、部屋同士にシーケンスをつくり出し外部を内に取り入れる。壁に囲まれた中庭、木に寄り添う部屋や大きなベランダで過ごし、その下に広がる光が落ち風が通り抜ける深い軒下はまちの雨宿りのような場にもなる。そこにある当たり前の環境をシンプルに取り入れ住戸のオリジナリティーを生むと共に郊外の一連な配置、滞った環境の中に関係をつくり出し、それが郊外の風景につながっていく。



「住まいの余白」

明治大学 大学院
理工学研究科 建築学専攻
増井 裕太

郊外住宅の新定義として、今まで家の内にあった居間を外へ開放し、「外(ソト)居間」という空間を考えた。
郊外住宅地は、都心には存在しない良好な環境を持つはずだが、敷地一杯の建物が連なる風景は、都心と変わらぬ寂しい個の暮らしを感じさせる。
ソト居間は、従来の家族形態が崩れて様々な人々が住むようになった郊外住宅地において、地域一体で暮らすような風景をつくり出す。



「おおきなつくえのイエ」

京都工芸繊維大学 大学院 工芸科学研究科
清水 嵩之・杉本 達哉

郊外住宅の街並みに、おおきな机をもった家を設計した。都市の拡大に伴って、人々の夢と共につくられたニュータウン。
しかし、もともと多くのニュー告ウンがベッドタウンとして計画されたことと、また近年、人口減少や高齢化、若年層の人口流出によって徐々に街は姿を変えてきたことで、昼間でも街に人の気配が感じられない現状となっている。
人がいなくなってしまった街並みに、人のための場所、人を感じられる場所在つくることで、この土地に根をはった「暮らし」の見える街になるのではないかと考えた。
大きな机が敷地の真ん中におかれたこの家は、敷地境界内すべてがリビングである。敷地よりひとまわり小さい家がつくるこの余白が窮屈な郊外の街並みにスキマを与えてくれる。中庭を囲うようにくると曲がった大きな机は、広場に求心性を与え、人々が集う場所をつくる。居住部分はプライベートな中庭と共に半地下に埋め、夫婦の仕事場は二階に持ち上げることで、一階は住宅の制約から解放される。
この土地に足をつけて生活することが、ひとのいる風景をつくり郊外のあたらしい住まい方となる。

佳作 (21点・順不同)



「変遷する家」

公立前橋工科大学 工学部建築学科
雨宮 慎吾・菅野 凌・飯嶋 雄二

街も、人も、家族も、変わらないものなど無い。歳を経るにつれて、住まい方も変わってゆく。子供たちの成長から巣立ち、夫婦は定年で仕事を辞め、趣味に生きるようにになり、家族の繋がりから次第に街の老人との交流に重きを置くようになる。老いた夫婦に広い家は必要なく、慎ましい住まいがあれば良い。こういった変わりゆく家族形態の変化に対応し「変遷する家」を考えた。歳をとって縮小する生活空間。それに反比例して増える屋外空間。変化していく家では、どのように家族の記憶が留まるのか。郊外住宅の新定義を考えた時、私たちがテーマに挙げたのは、「解体」でした。家族の「解体」、それに伴う住宅の「解体」。また、「解体」することで出来たスペースになにか生まれるものがあると思いました。時間経過で失うことを得ることに変換する動作が「解体」でした。しかし、現実問題として、お金を払って「解体」するような家を人が買うとは思いませんでした。そこで発案されたのが壁を可変のドアにするという案でした。この住宅は壁をドアとして、間取りを変化させることが出来る。その時に合った間取りを住まい手が選択する。次第に家は縮小していく、住居棟と趣味棟、中庭に分離するというストーリーを考えました。タイトルの「変遷する家」は時間経過とともに変わっていく家という意味です。



「街区の中のひとつの家」

関西大学 大学院 理工学研究科
ソーシャルデザイン専攻 建築学分野
坂口 文彦

家と家に必ず隙間があり、ひとつひとつの家の独立性が高い風景が広がる郊外の住宅地。その隙間に風土を見いだした。家族形態が搖らぎ変化する郊外住宅地の新しい在り方として、街区の中に広がる隙間という風土が独立性の高い家を繋ぐことで、ひとつの群としての住環境をつくる。周辺にコンテクストとして隙間を喚起する様な3つの地形を配し、その地形の上に立つひとつのボリュームによって周辺との間に建つ様な、様々な環境をもった家。街区の中にあるひとつの家として感じられることで生まれる広がりのある空間が集まって住む豊かさを提案する。



「タナのイ工」

神奈川大学 大学院
工学研究科 建築学専攻
中村 慧陸・伊藤 夏美

本来の郊外住宅と言えば、ご近所さんとのバス停での何気ない会話や帰りの駅で偶然会った後の一一杯といった地域での小さなコミュニティの連続があることで成立していた。しかし、SOHOを始めとした在宅勤務が主流になりつつある現代社会では、そういった何気ない地域コミュニティが衰退している現状である。以上の背景を踏まえ、郊外住宅の新定義として、住宅の一部を地域住民のための場として開放された「公園のような家」を提案する。具体的には家の外側に棚壁を纏った住宅を提案する。生活のための住居部分をコアとして、その外周部に棚壁を纏い、その周りに地域住民のための場を提供する。棚壁は地域住民のリサイクル品置場として機能する。地域住民は自分のいらなくなつた家具や文房具、芸術品といった廃材をカフェのある一部分の棚壁に置きに来る。その際に欲しい物を見つけたら持ち帰る。それでも余ってしまった廃材は藝大出身の廃材アーティストである施主夫婦によって再生される。2階にあるテラスは地減住民のために開放された外部空間であるが、施主夫婦の制作活動を垣間見ることができ、さらにアーティストとして作品制作を体験することができる。制作された作品は3階テラスにある棚壁にギャラリーとして展示される。地域住民の持ち寄るものによって家の表情が変わり、またガラスの壁面でできている棚壁は、埋まっている密度によって地域住民と夫婦の間にインラクティブを生む。いらないものを置きに来る人、欲しい物を探しに来る人、休憩をしに来る人、制作体験をしに来る人、ギャラリーを見に来る人、様々な目的を持った地域住民は棚壁を纏った家によって小さなコミュニティを誘発される。棚壁を纏った家は、現代社会の生み出した廃材という資源を再利用し、地域の新たなコミュニティのカタチを定義する。



「都市のはなれ」

京都工芸繊維大学 大学院
工芸科学研究科 建築設計学専攻
安田 翔太

“はなれ”とは、一定の広さをもった敷地内において主たる建物である母屋に対して、従たる建物として母屋から離れた場所に存在する建物をさします。都市部ではマンション建設やリノベーションなどが進み、快適で安価な居住空間を手に入れることがより容易になり、都心へ回帰する流れは今後も続くでしょう。そのような時、都市近郊に位置する郊外の住宅は、主たる都市に対して、従たる“はなれ”として振舞うべきだと考えました。そこで倉という“はなれ”に住まう作法を提案します。倉がもつ高床式の構成を踏襲し、一階はガラス建具で覆われた開かれたセミパブリックな空間に、上階は貯蔵と暮らしが行われるプライベートな空間になっています。各階は連続して並べられた棚壁を中心としてスキップフロアになっており、内部に様々な場所を生み出しつつ、1階セミパブリック空間と上階プライベート空間とを緩やかに繋ぐ構成となっています。ある時は住宅として、ある時は余暇を楽しむ週末住宅として、ある時は仕事場として、ある時はギャラリーとして、街の図書館として、柔軟にその機能を変えつつも、暮らしや仕事や趣味の中で収められた様々なものを通じて、“はなれ”として郊外にその姿を変えることなく、世代を超えて家族に寄り添った存在としてあります。

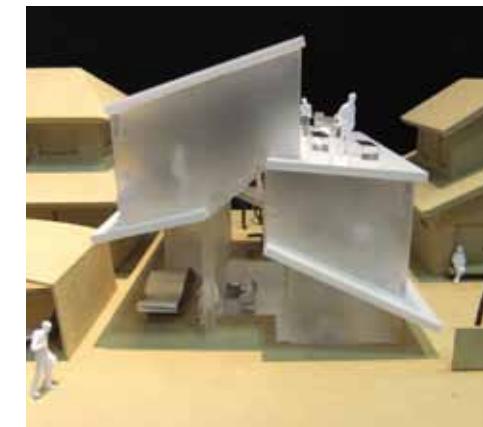


「みんなの大きな小屋」

東海大学 大学院
工学研究科建築学専攻
狩野 翔太

均質な内部空間や風景を作り自己完結し、外部との関わりが少ない今までの郊外住宅。住宅内外のシステムや街、社会が変化する中で、これからは自分の外にある様々な「みんな」を中心とするような暮らしが、生活や街、社会にとつても豊かになれると思った。そこで敷地とは「みんなの物」という定義をし、みんなと棲む小屋を提案する。地上部はふらっと寄れる街のリビングとなり、新たな関係を与えると共に、半地下の家には緩やかな屋根と吹き抜けを介して、みんなとの暮らしを感じられる豊かさを得る。また、二つの家の中心を貫く縦に長いSOHOは仕事場だけではなく展示空間にもなり、街やみんなと関わっていく。ここは様々な事が干渉し合う、みんなの大きな小屋。

佳作 (21点・順不同)



「相反する住処」

—郊外を彩る交わることのない職住混成住宅—

東京理科大学 大学院
理工学研究科建築学専攻 佐藤 聖

均質的風景/生活スタイルからの脱却

従来の首都圏と郊外の従属関係が崩壊し郊外が自立したものとなっている現在では住宅は住む事と働く事を同胞したものへ変化した。その結果、郊外における住宅は決して均質的なものではなく多様な仕事・多様な生活様式を内包した表情豊かなものであり、この表情が街へ聞かれる事で郊外は均質的風景から脱却し、郊外にしかできない風景を彩り、作り出すのではないか。

「チョップ・ザ・キリヅマ」

名古屋市立大学 大学院芸術工学研究科
久保井 智・望月 大地

新興住宅地やニュータウンをはじめ、我が国の郊外住宅地には、二段構えの屋根並みによる固有の風景を見て取ることができる。この慣習こそが“郊外住宅地”然とするものではないだろうか。しかしながら、それが必ずしも内部空間ないしは周辺の住宅に寄与しているとは言い難く、単なる装飾にすぎない。私たちは、この慣習的要素である「二段構えの屋根」を割ってずらすことにより、4枚の屋根が多様な場所を包含する戸建住宅を提案する。内部では、勾配をもつた屋根に沿うように生活が展開され、外部では、二段構えの屋根が周辺住宅との新たな緩衝域となるでしょう。郊外住宅地の俗に抗わず、形式を昇華させることが、私たちの考える新定義である。

「ガワのイエ」 郊外における近隣住居の提案

東京理科大学 大学院 工学研究科 建築学専攻
瀬野 建人・中東 壮史

私たちは郊外に新たな公共の場を提案する。そこは職をきっかけとして周囲に住む人々と住人とが対話する空間である。単なる共用から協働へ。そして都会への依存から郊外独自の在り方へ。中心地から距離をとった「ガワ」での生活を考える。「ガワ」と「イエ」 「ガワ」とは側であり、郊外を指すと同時に「ガワのイエ」の構成を表している。都会と郊外の、中心ー周縁(側)という主ー従の関係を解きほぐし、郊外独自の生活を模索した。かつて個人の財産に過ぎなかった郊外の家を、職住近隣のプログラムにしたがい新たにイエを創出する。職住近隣とは一年の大半を同じ場所で過ごすことを意味する。都会との既存の交通網やプログラムは活かしながら、まちと関係をもてるようなモデルを考えた。

「時間で揺らぐ家」 屋根と台地の狭間で

立命館大学 大学院 理工学研究科 環境都市専攻
建築都市デザインコース 吉岡 慶祐・中辻 浩介

パブリックとプライベートを漂う住宅を提案する。大きな屋根が土の上にかかった空間は建具で仕切られており、時間と使い方により表情を変える。平日の昼、建具を最大限解放すれば、主婦たちや放課後の小学生の集うパブリックな場となる。夜に建具を閉めれば、解放されていた地面は室内となり、家族のためのプライベートな空間となる。また屋根の下には植物が生えてきて、内と外の境界は年月とともに益々曇昧になる。野良猫さえもふわりと入り込む建築は、郊外の新定義となるのではないだろうか。

「堀がもたらすもの」 街区の豊かさを射程に入れた住宅の振舞いの検討

東京理科大学 大学院
理工学研究科 建築学専攻 星 洪祐

郊外住宅を新定義するためには少なくとも街区内で共有されるべきルールが必要だと考えた。街区内の公共的利益に通ずる交流のために、それぞれの堀をセットバックすること。共有と私有の価値観を並存させるために、縮小しながらも私有地は実質的に確保すること。この構成が私有空間の豊かさに寄与するために、堀が家の空間構成と関連づけられること。以上を条件づけた郊外のある街区に建つ、一軒を提案する。堀にまたがって佇む。堀の外の部屋で読書する。堀が貢入し、家の内と外が揺さぶられる。これからの郊外における共同性や空間性は堀を含めた構成に対する振舞いが規定する。例えば、この家のSOHOは堀の外にあるにも関わらず、平面的な秩序の内にある。

佳作 (21点・順不同)



「郊外住宅のスキマ」

首都大学東京 大学院
都市環境科学研究科 建築学域
大館 峻一 • **岡安秀樹**
法政大学
デザイン工学部 建築学科
工学研究科 建設工学専攻

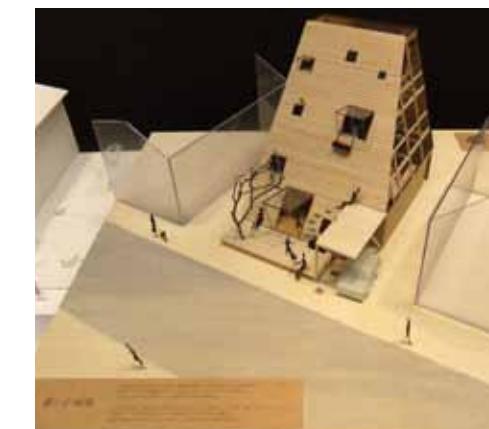
かつてにぎわいをみせた郊外住宅は、居住者の高齢化と建物の老朽化により様変わりしてきている。これらの要因として、均質な住宅地の整備により住宅間のつながりが生まれにくかったこと、同世代の同時入居により住宅地内の新陳代謝が行われなかつたことがあげられる。私達は、建蔽率の低い郊外の住宅間のスキマを利用した、「SOHO」居住者が多く集う新しい郊外住宅地を提案する。SOHO部分を子供部屋・貸部屋など住み変わりの余白部分とし、住宅・SOHO・エントランスの3つのボリュームに分け変化をつけることで、住宅間のスキマを創出した。このスキマでは、SOHO同士のクリエイティブなつながりを生み、住み変わった時も継続的なつながりを誘発させる。また、SOHOボリュームの木調に統一し、住居・エントランスボリュームの外壁及び、スキマの造りこみを居住者が自由に設定することで、居住者の特徴を表しながらも街並みの統一を創出し、郊外住宅のエリア価値向上を図った。



「共有する壁の家」

中部大学 大学院
工学研究科 建設工学専攻
梅村 陽一郎

私は一般的な郊外の住宅地で育った。南にはリビングがあり、その隣には庭、北には水回りがある、よくみられる郊外の住宅だ。私の部屋は東に面しており、朝日とともに目覚めるととができる。しかし、リビングへ行くとまだ薄暗く、どこか距離を感じた。だが、雨や雪のときは、どの部屋でも同じ環境を感じることができ、距離が近く感じることができた。そこで私は、環境を共有する家を提案する。共有しながら個々の場所も確保するために、線状の壁を配置する。すると、光は少しづつ変化し、質の異なる光を場所に与える。風や香りなどの環境も感じることができ、家全体を一体に感じ、家族との距離も近くなる家となる。また、個々の場所では長手方向へは家全体を感じ、短手方向へは独立した空間を感じる見え方をする空間が得られる。方角によって環境が分け隔たれるのではなく、それを共有する建ち方は、これから郊外住宅であるべき姿ではないか。



「集いの屋根」

東洋大学 大学院
福祉社会デザイン研究科
人間環境デザイン専攻
早川 亮

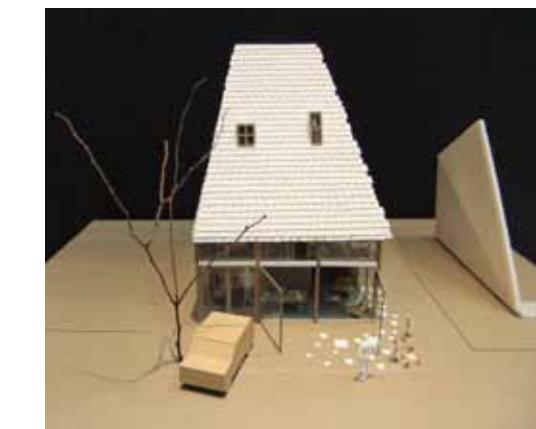
新幹線の車窓からみえる無数の屋根の連なり。屋根は郊外住宅地の風景をつくっているが、屋根からはじまる暮らしがもっと豊かにならないだろうかと考えた。 “屋根の下” の家族の暮らしと、“屋根の上” の住民同士の暮らし。屋根の表裏での生活がつながりあう、半公共的な住宅を提案する。



「内が外の家」

家の中に外を受け入れ、他者と生活を共有する
横浜国立大学 大学院
都市イノベーション学府
建築都市文化専攻Y-GSA
川端 俊輝

部屋と部屋の間に都市を引き込む。全ての部屋が直接都市とつながる。内側に引き込まれた都市は、住宅の外周に残された隙間をつなぎ、居場所をつくる。都市を内包した住宅は、他者を受け入れていく。



「庭入り一戸建てのすゝめ」

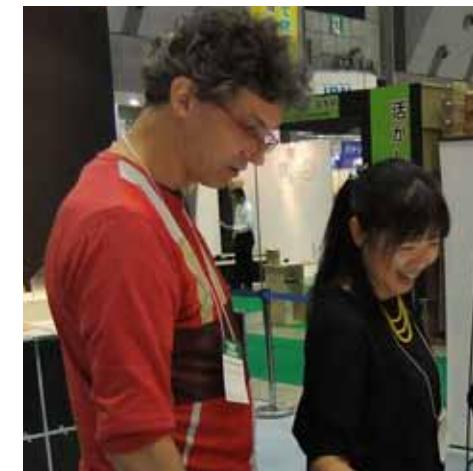
芝浦工業大学 大学院
理工学研究科 建設工学専攻
坂上 優

事のマイホームを連想させる「庭付き一戸建て」の言葉。そんな家と庭とのセット商品は次々と立ち並び、郊外住宅地に家を構える人々のステータスとなっています。しかしそこに生まれている建築と自然との関係はGL部分だけの、そして身近な存在とは云い難い関係のものです。そこで各階において建築と自然とがほぼ60%と40%の関係になるようなこれからの郊外住宅を提案します。そうすることでこの家は庭を内包し、どの階においても建築と自然とが身近な関係をもつた緑に彩られる安らぎの場をもつ存在となります。作られた自然、敷地の残り物の自然ではなく、自然に沿うように建築が建つことで、近所の知り合いのみんなが緑に誘われて集まつてくるような、ささやかなにぎわいをもつた住宅となるのではないでしょうか。そんな住宅がひとつまたひとつ、郊外住宅地に増えていくことにより、建築一戸ずつの住環境のみならず棲み易い環境がつくりあげられていくのではいでしょうか。郊外住宅の新定義、それは「環境の質／暮らしの質／街の質」を建築と自然との関係を見直すことにより向上させていくことのできるそんな住宅の在り方なんだと思います。

2013 residential design competition
[住宅設計コンペ]

二次審査の様子

平成24年 11月14日(水)
会場:東京ビッグサイト(ジャパンホームショー会場)



jury



Kensuke Yoshida
吉田 研介
吉田研介建築設計室



Manuel Tardits
**マニュエル
タルディツ**
みかんぐみ



写真家:宮原 夢画(Muga Miyahara)

Kazuko Akamatsu
赤松 佳珠子
株式会社シーラカンスアンド
アソシエイツトウキョウ(CAt)

time schedule

エントリー締切	平成25年 8月23日(金) PM5:00まで	JACSホームページのみ URL : http://www.jacs.cc/
1次応募締切	平成25年 8月30日(金)必着	郵送先: JACS新潟事務局(株式会社ステーツ内) 〒950-0148 新潟県新潟市江南区東早通1-1-40 Tel.025-383-5233 Fax.025-383-3733 データ送信先: compe@states.co.jp (pdf、もしくは、jpeg:200dpi以上し、フォルダにまとめ、zip・LZH圧縮し送信)
1次審査	平成25年 9月 9日(月)	会場:JACS東京事務所(予定) 審査員の協議により選定いたします。【非公開】
1次審査発表	平成25年 9月10日(火)	審査会場での展示は行いません。結果は1次審査通過者にメールで通知するとともに、後日ホームページ上にて発表。 1次審査通過者は2次審査の準備をお願いいたします。
2次応募締切	平成25年 10月15日(火)必着 PM5:00まで	郵送先: JACS新潟事務局(株式会社ステーツ内) 〒950-0148 新潟県新潟市江南区東早通1-1-40 Tel.025-383-5233 Fax.025-383-3733
2次審査・表彰式	平成25年 10月23日(水)	会場:東京ビックサイト(ジャパンホームショー2013会場内にて) (講評会・表彰式は二次審査後に同会場にて開催) ホームページ上にて発表。

prize

下記賞品を受賞された方に差し上げます。

- 最優秀賞(3点) 賞金 20万円
- 優秀賞(5点) 賞金 10万円
- 佳作(22点) 賞金 2万円 (ただし模型提出者に限る)

(1次審査を通過し、2次審査にエントリーした作品全てを入選とします。)

最優秀作品を始め各入賞作品のうち、
設計者の希望するものについては、
建築・販売を実現するため、JACSが全面的に
バックアップ致します。

注意事項

- ・他者の著作権に触れる画像、文書などの使用は認めません。 ・雑誌、書籍、ホームページからの無断借用も認めません。
- ・2次審査提出模型のみ、ご希望される方には返却を行います。その他の提出品は一切返却いたしません、必要な場合はあらかじめ各自で複写しておいてください。
- ・本コンペの応募作品の著作権は応募者に帰属しますが、入賞作品及び入選作品の発表に関する権利は主催者が保有します。
- ・入賞後の応募者による応募内容の変更是認めません。 ・入選入賞後に、著作権侵害などの疑惑が発覚した場合、これを取り消します。
- ・応募作品にて著作権侵害などが発覚した場合、全ての責任は応募者が負うものとなります。
- ・審査の結果については、何人も異議の申し立てをすることは出来ません。

※応募に際して主催者側が取得した個人情報並びに提出物は、当コンペのみに使用されるものであり、その目的の範囲を超えて個人情報を利用する場合、事前に応募者にその目的を通知し、承諾を受けて行うものとする。